大学生の自我体験に関する事例研究

―意識の無化作用に関するサルトルの思索を手がかりとして―

加藤誠之

（高知大学人文社会科学系教育学部門）

A Case-Study on the “Ego-Experience” of University Students－Using Sartre’s Thought on the “Annihilating Function of the Conscience” as a Guide－

Masayuki　Kato

(Education Unit, Humanities and Social Sciences Cluster, Kochi University)

Abstract: In juvenile psychology, it is said that young people have “ego-experience” (Ich-Erlebnis) at the beginning of their adolescence.　It is, after Sartre’s thought, a experience of separation from the world, from themselves, and from their own bodies by “annihilating function” (néantisation) of the conscience and the ground of many juvenile problems. But this experience is, after recent researches, not rare nor exceptional at all but quite common among young people.　In this paper, it will be aimed to elucidate the essence of “ego-experience”, based on some cases of University students.

キーワード：思春期，自我体験，意識，無化作用

はじめに

近年，我が国の心理学会では，一部の研究者によって青年期の自我体験（Ich-Erlebnis）という事象が注目され，研究対象とされている．例えば，2004（平成16）年には，1999（平成11）年に行われた発達心理学会でのシンポジウムに基づき，新曜社から『<私>という謎―自我体験の心理学―』と題する論文集が出版されている[1]。後の論述を先取りして言えば，ここで言う自我体験は現象学－実存主義哲学で言う世界－内－存在（In-der-Welt-Sein）[2]の成立の経験であり，思春期の開始を告げる体験に他ならないと考えられる．本稿では，この体験の本質をサルトルの現象学的存在論を導きの糸として解明しつつ，筆者の知り得た幾つかの具体的なケースについて論じていきたい．

第１章　思春期の子どもたちの自我体験（その１）―自己と世界との分離―

第１節　肯定的な世界との分離

小出浩之は，思春期以前の子どもたちの対人関係について以下のとおり述べている[3]．

言葉のレベルで言えば，子どもはまず自分をいい子に同一化する．この世の中では小さな子どもはすべて，いい子，可愛い子とされ…（中略）…まずは何の苦もなく，自分をいい子，可愛い子へと同一化する．…（中略）…いい子へと同一化できることはこの世界に存在する根拠であり，人間的生命，生きていく力を賦与されたことである．この同一化があるからこそ，その後の人生の様々な不幸にも子どもは…（中略）…基本的には世界に受入れられた者として自分の未来に希望を託しうる．

この言葉は，思春期以前の子どもたちの在り方を考える上で示唆に富んでいる．もちろん，彼らも世界の中で日常的な生を営んでいる限り，自分を受け入れてくれない迫害的な他者に出会っているはずである．しかし，彼らにとって，こうした他者は肯定的な世界の中でたまたま出会われた例外的な存在であり，肯定的な世界への信頼を揺るがすには至らない．すなわち，彼らは，肯定的な世界の中にあたかも溶け込んで一体化するかの如き仕方で休らっており，当該世界と自分とを切り離す亀裂を知らないのである．しかし，彼らは思春期を迎えると，こうした仕方で肯定的な世界の中に休らっていられなくなる．このことは，既に言及した自我体験に関する検討を通じて直ちに明らかになる．

自我体験とは，ビューラー，Ch.によって「『青年期における自我の発見』の，体験的に純粋かつ極限的な現れを指す語」として導入された語である[4]．高石恭子に従えば，当該体験は「自分を対象化して意識している主体であるところの〈私そのもの〉に気づく体験」であり，思春期に「自己観と世界観の変容を意識」した経験の多くはこれに当たる[5]．また，天谷祐子に従えば，当該体験は「純粋に『この私』，世界も身体も剥ぎ取った純粋な『私』という意味での私についての『なぜ』という問いが発せられる現象」[6]であり，天谷の調査に従えば，中学生～大学生881名を対象とした調査で43%の者によって体験されている身近な経験とされる[7]．本節では，こうした自我体験の意味を，当該体験に関する範例的記述として有名なルドルフ・フォン・デリウスの以下の記述[8]をもとに考察する．

私は自我意識が個人的にどのように始まったかを語りたい．…（中略）…私はおよそ十二歳になっていた．私は非常に早くめざめた．…（中略）…私は起き上り，振り向いて膝をついたまま外の樹々の葉をじっと見た．この瞬間に私は自我を体験した．すべてが私から離れ，私は突然孤独になったような感じがした．妙な浮かんでいるような感じであった．そして，同時に自分自身に対する不思議な問い，お前はルディ・デリウスか，お前はお前の友達がそう呼んでいるのと同じ人間か，学校で一定の名前を持ち一定の評価を受けるその同じ人間なのか，お前は同一人物なのか．私の中の第二の私が，ここまでまったく客観的に名称としてはたらくこの別の私に向かい合った．それは，今まで無意識的にそれと一体をなして生きてきた私の周囲の世界からのほとんど肉体的な分離のごときものであった．私は突然自分を個体として，取り出されたものとして感じた．…（中略）….

ルドルフ・フォン・デリウスは，ここで語られている自我体験の中で，自己と世界との分離とも呼ぶべき事態を挙げている．確かに，ここでは，ルドルフ・フォン・デリウスと世界とを分離する何かは見出されない．しかし，サルトルに従えば，ここで彼を世界と分離したのは，まさに「何でもないもの（rien）」すなわち無（néant）に他ならない．そもそも，サルトルに従えば，事物すなわち即自存在（être-en-soi）は無と関係をもたない「完全な肯定性」[9]であるゆえに「他性」[10]を知らず，「自分以外のものと関係を有し得ない」[11]．そもそも，関係という概念は別のものとして区別される複数の存在の間に成立する概念であり，「項Ａは項Ｂでは無い」という仕方で各存在を分離する無を前提としている．他方，サルトル,J.P.に従えば，人間の意識（conscience）すなわち対自存在（être-pour-soi）は「世界の中に無を生じさせる存在」[12]である．そもそも，サルトルに従えば，人間の意識は超越的（transcendant）[13]な諸存在をあたかも自分の前に立てるかの如き仕方で対象としてとらえる定立的意識（conscience positionelle）であり，「超越的対象の定立でない意識は存在しない」[14]．しかし，この作用は世界の中に無を導入する意識の作用，すなわち，無化作用（néantisation）によって基礎づけられている．すなわち，人間の意識は超越的な諸存在と自分との間に無を導入し，前者を自分では無い者として分離することを通じて，前者を対象としてとらえることを可能にしているのである．ルドルフ・フォン・デリウスの自我体験は，こうした無化作用による世界－内－存在の根本的な変容体験として理解され得る．すなわち，彼の「自我体験」は，自己と世界の間に導入された無による自己と世界との分離の体験として理解され得るのである．それ故，彼は自我体験の中で，あたかも世界と切り離されたかの如き「浮かんでいるような感じ」を体験したのではないだろうか．

第２章　思春期の子どもたちの自我体験（その２）―自己と自己との分離―

第１節　反省的意識の成立

サルトルに従えば，即自存在は無と関係をもたない完全な肯定性であるゆえに自分以外の存在と関係を有し得ないばかりか，他ならぬ自らとも関係を有し得ず，常に「自らとぴったり密着」して「それ自体として在る」[15]．そもそも，関係という概念は既に述べたとおり，違うものとして区別される複数の存在の間に成立する概念である．それゆえ，自らとの関係という概念も，関係を有する主体としての自分および関係をもたれる客体としての自分との分離を前提としている．しかし，即自存在は無と関係をもたない完全な肯定性であるゆえ，こうした分離とも無縁なのである．他方，対自存在は，無化作用によって自らの中に無を導入することを通じて，自らを世界の中で出会われる諸存在を対象としてとらえる素朴な意識およびこれを対象としてとらえる特殊な意識へと分離し，この両者の間に反省（réflexion）[16]という関係を打ち立て得る．実際に，ルドルフ・フォン・デリウスの自我体験の中では，自己と世界との分離と並んで，自己と自己との分離と呼ぶべき事態も生起していた．確かに，ここでは，彼を二人の人間へと分離する何かは存在しない．しかし，サルトルに従えば，彼はこの体験の中で無化作用によって意識の中へと導入された「何でもないもの」すなわち無による意識の分離を経験すると共に，他ならぬ自らを対象としてとらえる反省的意識の成立を経験していたと考えられるのである．

第２節　自己の存在の偶然性の自覚

サルトルに従えば，即自存在は自分以外のものと関係を有し得ないので，自分以外の何者かによって根拠づけられ得ない．それゆえ，即自存在はいかなる存在理由も有しない「余計なもの」である[17]．他方，対自存在は自己と世界の間に無を導入することを通じてこの両者を分離し，世界の中で出会われる諸存在を対象としてとらえ得る．また，対自存在は自らの中に無を導入し，他ならぬ自らを前述の素朴な意識および特殊な意識へと分離する．サルトルに従えば，対自存在はこうして無と関係をもたない即自としての存在を失い，「意識としての自己を根拠づける」[18]のである．しかし，サルトルに従えば，「対自の出現…（中略）…の中に呑み込まれ無化される即自」は，やはり「対自の懐にその根源的な偶然性として止まっている」[19]．すなわち，サルトルに従えば，対自存在はもともと偶然的な存

在であり，自らの無化作用によって自らを対自存在として根拠付けるようになっても，自らの有する根源的な根源的な偶然性を逃れられないのである．それゆえ，思春期の子どもたちは反省的意識の成立を経験するとき，自らの存在の偶然性を強く意識せざるを得なくなる．例えば，渡辺恒夫・小松栄一は「自我体験」に関する研究の中で大学生に対する質問紙調査を行い，「［小学校高学年のころ］[20]スピーチしている友人をじっと見つめていて，どうしてこの人は○○さんなんだろうと思ったとき，どうして自分は自分なんだろう，他の人にも生まれることができたのではないだろうかと考えたことがありました」，「小さい頃，母に植物や虫等にも命があると教えられた時，では，なぜ，私は，雑草でもなく，たんぽぽでもなく，電柱でもなく……私なんだろうか，と考えた．そのような事を考えた時は，心と体が別々になり，心だけが浮かび上がるような，そんな感じがした」という回答を得ているのである[21]．

第３節　時間的存在としての自覚

サルトルに従えば，対自存在は無と関係を有さないので，自分以外の何者とも関係を有し得ないばかりか，他ならぬ自分とも関係を有し得ない．それゆえ，即自存在は過去の自分とも未来の自分ともいかなる関係も有し得ず，「時間性（temporalité）を逃れている」[22]．他方，対自存在すなわち人間の意識は，過去の自分及び未来の自分と常に関係を有しており，「時間的形式のもとでなくては存在し得ない」[23]．それゆえ，思春期の子どもたちは反省的意識の成立を経験するとき，自らの有する時間性を自覚し，自分の過去または未来について明確な自覚をもつようになる．例えば，天谷祐子は自我体験に関する研究の中で中学生に対して面接調査を行い，「［自分は］どっから来たんだろうとか，何でいるんだろうとか，なんか，最初の人間はどこから始まったのかな，とか，なんか，それを思っていたら，どんどん思っちゃって…（後略）…」「どこから来たと考えると，ずっと前から魂みたいなものがあって，何度もリサイクルみたいに使われているのか…（後略）…」等の回答を得ている[24]．これらの問いは，まさに自分の究極の過去に関する時間的な問いであると考えられる．また，渡辺・小松は，先に挙げた質問紙調査の自由記述の中で「突然ふとした瞬間に…（中略）…私もいつかは死ぬんだと考えることがある」，「自分が死んだらどうなるのだろうと考えているうちに，自分というものがよくわからなくなって，怖くなってよく泣いていた」等の回答を得ている[25]．これらの問いは，まさに自分の究極の未来に関する時間的な問いであると考えられるのである．

第３章　思春期の子どもたちの自我体験（その３）―意識と身体との分離―

第１節　自己の意識と身体との分離

サルトルに従えば，人間の身体（corps）は意識にとって構成的であるにもかかわらず，意識によって「黙過され」，「なおざりにされる」当のものである[26]．例えば，人間は何らかの活動を遂行する際，自分の身体をあたかも意識と溶け合って一体化しているかの如くとらえており，自分の身体を対象として意識しているわけではないのである．しかし，思春期の子どもたちは意識の無化作用によって自己と世界との間及び自分の意識の中に無を導入するとき，自分の身体と意識との間にも無を導入し，自分の身体を自分の意識とは分離された対象としてとらえるようになる．例えば，先に挙げた「自我体験」に関する言及の中でも，「小さい頃，母に植物や虫等にも命があると教えられた時，では，なぜ，私は，雑草でもなく，たんぽぽでもなく，電柱でもなく……私なんだろうか，と考えた．そのような事を考えた時は，心と体が別々になり，心だけが浮かび上がるような，そんな感じがした」[27]等身体と意識との分離を示唆する言葉が見受けられたのである．

なお，笠原嘉は著作の中で，青年期は「わが身体」との最初の「出会い」の時期であると指摘している[28]．もちろん，人間は，生まれたときには既に自分の身体を有している．しかし，人間はこのことにもかかわらず，自分の身体を意識と切り離された対象としてとらえ，もって自分の身体と「出会う」ためには，思春期までの長い時間を要するのである．

第２節　他者の意識と身体との分離――般的他者の出現―

人間は世界の中で日常的な生を営んでいるとき，常に身体を有する個別的他者と出会っている．しかし，思春期の子どもたちは意識の無化作用によって自分の身体と自分の意識とを分離するとき，当該作用によって他者の身体をも他者の意識と分離する．それ故，思春期の子どもたちは世界の中で日常的な生を営んでいるとき，身体によって担われない純粋な意識作用としての他者，すなわち，サルトルの言う「まなざし（regard）」[29]としての他者を見出すようになる．しかも，当該他者は，人間を偶然的に与えられた個別的・具体的状況の中へと拘束し，当該状況の中で偶然的に課せられた個別的・具体的諸条件を背負う他の誰でもない自分，すなわち，実存（existence）たらしめる事実性（facticité）[30]としての身体[31]を欠いているので，具体的には誰でもなく，しかし，それゆえにこそかえって誰でも有り得る一般的他者として立ち現れる．このことは，思春期を迎えた子どもたちを研究対象とする人間諸科学の分野でも夙に指摘されてきた．例えば，小出浩之によると，思春期という時期は「具体的・個別的な他者の背後に他者一般が見えてくる時期，即ち他者が他者一般を担って現れてくる時期」であるとされる[32]．また，村瀬孝雄によると，思春期という時期は他者の「まなざし」を意識し始める「他者の出現」の時期であり，特にその後半は「一人ひとりの他者の背後にある，もっと根源的な『他者一般』ともいうべきもの」との出会いの時期であるとされるのである[33]．

第４章　思春期の子どもたちの自我体験（その４）―性的身体の出現―

第１節　危機の源泉としての性的身体

ところで，思春期を迎えた子どもたちは，多くの場合は自分の身体を性的身体として見出している．しかし，思春期を迎えた女子にとって，自分の性的な身体を受け入れることは決して容易ではない．そもそも，近年では若い女性も「男女の文化境界」の不明確化に伴い，受験を始めとする業績主義的な社会システムに巻き込まれ，「男の子と同じような自己実現に照準を合わせ」て思春期・青春期を過ごしている[34]．こうした彼女たちにとって，「母親になること」は「業績価値の世界とは異質な"自然界"」に直面してアイデンティティを攪乱される経験であり得[35]，また，「それまでの社会関係やなにがしかの自己実現の活動をあきらめるか縮小」せざるを得なくなる「喪失体験」であり得る[36]．更に，彼女たちにとっては，育児もまた「いきなり"生きもの"を与えられ，それが生きるの死ぬのともものすごい責任の重圧」[37]をかけられる危機的な経験であり得るのである．

それゆえ，思春期を迎えた女子は，時として異性の性的なまなざしを拒否し，もって自分の「性別づけられた存在」を否認する必要に迫られるのである．例えば，彼女らの中には，性に対して強い嫌悪感または恐怖感を抱き，異性との接触を忌避する者も見受けられる．また，彼女らの中には，いわゆるボーイッシュな在り方を好み，あたかも女性であることを否認するかの如く振る舞う者も見受けられる．また，彼女らの中には，同性で閉鎖的なグループを形成し，俗に「トイレに行くのも一緒」などと言われるほど密接な関係を営む者も見受けられる．こうした在り方は，女性によって構成される小さな世間を形成し，こうした世間の中に閉じこもって異性の性的な「まなざし」を回避しようとする試みであり，ある意味では「引きこもり」に似た方法を採用していると言えるであろう．

第２節　性的身体を否認する在り方―拒食系の摂食障害―

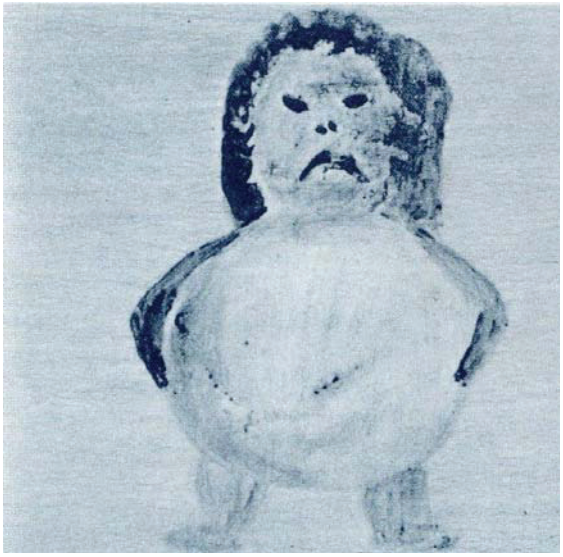
また，神経性食思不振・思春期やせ症などと呼ばれる拒食系の摂食障害は，思春期以降の女性に好発するとされている[38]．こうした障害は，滝川一廣によって「身体そのものを極限まで細らせ，いっそ消滅させてしまいたいという欲求に根ざしている」[39]と指摘されているとおり，異性の性的なまなざしを徹底的に回避するために自分の性的身体を無くし，身体なき存在として生きる試みに他ならない．ちなみに，クリスプ，A.H.は，一部の女性は生殖可能期間を通じてこうした障害を持ち続け，閉経期を迎えるや軽快すると指摘している[40]．このことは，摂食障害の本質はまさに自分の性的身体の否定であることを如実に示していると言えるであろう．しかし，彼女たちは人間である以上，こうした試みを成功させられるはずもない．それゆえ，彼女らは，時として拒食と，その挫折に伴う反動としての過食との間を往復せざるを得なくなる．実際に，拒食系の摂食障害をもつ女性は，時として「深夜に冷蔵庫の中身を平らげてしまう」など爆発的な過食を行うのである[41]．しかも，野上芳美・矢花芙美子に従えば，拒食は自己制御，競

争，勝利というテーマと関連し，「勝ち誇った態度で継続」されるところ，過食は自己制御の喪失，競争の放棄，敗北というテーマと関連し，「孤立無援感と自尊心の低下を伴う敗北状態」に導くとされる[42]．このことは，過食は女性にとって，身体なき存在として生きる試みの挫折であることを示しているのではないだろうか．

第３節　拒食系の摂食障害者にとっての対自－身体

ところで，拒食系の摂食障害を持つ女性は，自分の身体について歪んだ認知またはイメージを持っていると言われる[43]．例えば，彼女たちは，心理療法の一環として自画像を描くよう求められると，時として自分を以下のような極端に醜い仕方で描くのである（図①参照）[44]．

図①　拒食系の摂食障害を有する女性の自画像



ただし，サルトルに従えば，私にとってあるがままのの自分の身体，すなわち私の「対自－身体（corps-pour-soi）」と，他者によって対象としてとらえられる私の身体，すなわち私の「対他－身体（corps-pour-autrui）」とは別の存在論的次元に属している．すなわち，サルトルに従えば，人間は自分の対自－身体を第一義的には「認識し得る所与」としてではなく，「これに対して他の観点を取り得ない観点」として生きている[45]．こうした観点は認識の根拠であるゆえ，それ自体としては認識の対象となり得ない．それゆえ，私の「対自－身体」は，他ならぬ私自身によって「なおざりにされ（négligé）」，「黙過され（passé sous silence）」る当のものである[46]．確かに，人間は時としてことさら反省的な態度を取り，自分の身体を対象としてとらえ得る．しかし，こうした仕方でとらえられた私の身体は，ことさら他人の観点に立って見られた私の身体であり，私にとってあるがままの私の身体ではないのである．

以上の論述に基づけば，拒食系の摂食障害を持つ女性の自画像は，彼女たちの歪んだ認知またはイメージの反映と言うよりは，むしろ，彼女たちによって生きられている「対自－身体」の率直な反映ではないかと考えられる．すなわち，彼女たちは自らの「対自－身体」をとうてい受け入れられずに持て余し，捨て去ってしまいたいほど憎んでいるゆえに，これを前掲の自画像のような仕方で描かずにいられないのではないかと考えられるのである．

第４節　性的身体を過剰に受容する在り方―性的逸脱―

もっとも，思春期を迎えた女子は，異性の性的なまなざしに対して常に拒否的な態度を採っているとは限らない．例えば，最近の若い女性の中にも，「男は仕事，女は家庭」という類の伝統的性分業を肯定し，男性中心の業績主義的な社会システムに対して距離を置き，結婚，妊娠，出産を経て母親になることを当然または価値あることと見なしている者は決して皆無ではない．例えば，筆者は大学院生であった 1990 年代に女子中高生を対象とする相談を行っ

た際，「女の子だから」という理由で比較的進学しやすい女子短大への進学を希望すると共に，卒業後は数年間の就労を経て専業主婦になり，家事と育児に専念したいと語る者を時おり見かけている．しかも，彼女たちにとって，異性の性的なまなざしによって露わにされる自分の性的な身体は，性的魅力という強力な肯定的価値の源泉でもある．それゆえ，思春期を迎えた女性の中には，時として女性であることを積極的に引き受ける者も見受けられるのである．例えば，竹内常一は，前思春期を終えて本格的な思春期へと差しかかる小学校高学年の女子の中には，時として「女っぽさ」という価値に「熱病的にとりつかれ」，「女っぽさ」を競うグループも見受けられると述べている[47]．

ちなみに，非行のある女子の中には「援助交際」と俗称される売春類似行為を行い，その目的は金品を手軽に得ることであると語る者もいる．しかし，彼女たちの中には，恵まれない家庭環境に育って愛情飢餓に陥っており，他者によって価値ある存在として受け入れられたいという願望を強く有している者も少なからず見受けられるのである．確かに，彼女たちは，時として既に述べたとおり，自分の性非行は金品を手軽に得るための行為であると語っている．しかし，彼女らは，実際には自分の性非行に対して払われる金品を経済的価値のトークンとしてではなく，むしろ，異性によって価値ある存在として認められたことの証と受け止めているのではないだろうか．実際に，彼女たちの中には自らの性非行について語るとき，時として，自分を魅力ある女性と認めてくれる男性を見出せて嬉しかったと述べる者もいるのである．それゆえ，性非行のある女子に対しては，いわゆる貞操観念を根拠として説諭を行い，または望まない妊娠，STD などのリスクを説くだけでは十分な効果を期待できないと考えられる．すなわち，彼女らの性非行を抑止するためには，彼女らに対して，性的魅力は他者によって価値ある存在と認められる上で唯一の条件ではないことを根気強く教えていかなくてはならないと考えられるのである．

第５章　大学生に見る自我体験の実例

ところで，自我体験は既に述べたとおり，中学生～大学生 881 名を対象とした調査で 43%の者によって体験されており，特に珍しいとは言えない．そこで，筆者は 2009（平成 21）年７月，筆者の担当する科目を受講した学生に呼びかけ，大学２年生～４年生数名の体験談を入手した．本論ではこの体験談を題材として，現実の自我体験の諸相について考察していく．なお，本論では，体験談を提供してくれた大学生の属性に関する情報は余り重要ではないと考えられるので，本人の特定を避けるために省略した．

第１節　大学生の自我体験（その１）―対私的な身体と対他的な身体―

仮に B さんとする女子大学生は，筆者に提出した体験談で以下のとおり語っている．

私は思春期には夜になると必ず「死んだらどこに行くのか」と考えていたことを覚えています…（中略）…まるで世界と切り離されたような感覚に陥って…（中略）…人は生まれた瞬間から死に向かっていることがひどく怖かったのです．なぜ自分は生きているのだろう，死んだらどこに行ってしまうのか．…（中略）…自分という存在は何か．身体はあっても自分の目で自分を見ることはできない．鏡に映った自分も本当に自分なのか．といったことから，本当に自分は存在しているのかといった考えで頭がいっぱいでした（下線部は引用者）．

B さんはここで「世界と切り離されたような感覚」について語っており，本稿で言及したルドルフ・フォン・デリウスと同様，意識の無化作用による世界との分離を体験していたと考えられる．また，彼女はこうした体験と共に，自らの有する時間性および偶然性を強く意識しており，本稿で言及した反省的意識の成立を体験していたと考えられる．更に，彼女はここで「身体はあっても自分の目で自分を見ることはできない」，「鏡に映った自分も本当の自分なのか」と語っている．ここで問題となっているのは，一言で言えば，対私的な身体と対他的な身体との対立に他ならない．そもそも，サルトルに従えば，人間の身体は既に述べたとおり，人間の意識によって差し当たってたいてい

黙過され，なおざりにされている．例えば，人間は何らかの活動を行っている際，差し当たってたいてい自分の身体をあたかも自分の意識と溶け合って一体化しているかの如く経験しており，これを対象として意識しているのではない．サルトルに従えば，こうした仕方で生きられている身体こそ，人間にとってただ実存される（existé）ままの最も根源的な身体，すなわち，サルトルの言う対私的な身体なのである[48]．しかし，思春期の子どもたちは「自我体験」を契機として自らと世界との間および自らの意識の中に無を導入するとき，自らの身体と意識との間にも無を導入し，自らの身体を意識とは分離された対象としてとらえるようになる．こうした身体は反省の対象としてとらえられた身体であり，反省は自分に対して他者の視点に立つことであることを考えれば[49]，いわば，準ー他者によって対象としてとらえられた対他的な身体に他ならない．しかし，こうした対他的な身体は自分の目によって見られない身体であり，「原理的に私の手の届かないところにある」身体であるゆえ[50]，私にとって常に違和感のある身体とならざるを得ない．ちなみに，鏡を用いて自分の身体を見ることとは，自分の身体に対して擬似的に他者の視点を取り，自分の対他的な身体を擬似的に経験することに他ならない．しかし，こうした仕方で経験された自分の身体も原理上「私の手の届かないところにある」身体であるゆえ，「本当に自分［の身体］なのか」と疑われざるを得ないのである．

第２節　大学生の自我体験（その２）―「真の居場所」に関する空想―

仮にＣさんとする女子大学生は，筆者に提出した体験談で以下のとおり語っている．

高校の時にある小説に出会いました．その小説は，現代にいるある女子高生が，突然異世界に連れて行かれ，本当はその異世界こそが自分のいるべき，生まれた場所であり，そこで自分に与えられた使命を果たす，という内容の小説でした．その小説を読むうちに，「私もこの世界は本当の居場所ではなく，他の場所に私の真にあるべき居場所があるのでは」という気持ちになりました．しかし，そのことで普段の生活に何か影響したかといえばそうではなく，ふつうの生活をしていました．

ここで彼女によって語られている「『私もこの世界は本当の居場所ではなく，他の場所に私の真にあるべき居場所があるのでは』という気持ち」は，思春期を迎えた女子の間では時おり見受けられる．例えば，我が国では，1980年代に10代女子の間で「前世の仲間」探しが流行し，超常現象・心霊現象などを取り扱う雑誌の文通欄では「前世の仲間」を求める投稿が目立っていたとされる[51]．特に，1989（平成元）年には徳島市で自分たちを「前世の仲間」と信じていた中学２年～小学５年生の女子３名が臨死体験を通じて前世を垣間見ようと試み，鎮痛解熱剤を乱用して人事不省に陥る事件を起こしている[52]．なお，赤坂憲雄はこの件について，彼女たちの転生譚はダライ・ラマの転生信仰など幾つかの文化で広く認められている転生譚と違い，歴史からも他者との関係性からも完全に遊離していることを特徴としていると指摘している[53]．彼女たちのこうした転生譚は，既に本文で論じたとおり，自我体験に伴う世界との分離および当該分離に伴う他者との具体的な関係の根こぎという事態を背景として生じたのではないだろうか．

第３節　大学生の自我体験（その３）―即自存在の偶然性に関する意識―

仮にＤさんとする女子大学生は，筆者に提出した体験談で以下のとおり語っている．

私は，なぜ生きているのかを疑問に思うことが多く，特に高校時代には人間自体が滅びればいいと思うことさえありました．それはふとした瞬間で，一番多かったのが夜に外出しているときでした．別に何かがあるわけではないのですが，人工的な光を見ていると吐きそうになり，人間という存在が消えて，人間が創造してきたものも消えてしまえばいいのにと思います（下線部は引用者）．

D さんはこの文章の中で，「人工的な光」を見ると「吐きそう」になるという興味深い発言を行っている．そもそも，サルトルに従えば，人間は世界の諸事物を，差し当たってたいてい自らの諸可能性を実現する上で利用されるべき道具として見出している．しかし，世界の諸事物はこのことにもかかわらず，本来は何の原因も理由もなく存在している偶然的な存在に過ぎないのである．サルトルに従えば，人間は事物の有するこうした根源的な偶然性を見出すとき，「吐き気（nausée）」を覚えずにいられなくなる．特に，人間は排泄物・腐敗物など道具としては利用し得ない事物を目の当たりにするとき，まさに何の理由も原因もなく存在している事物のむき出しの偶然性に直面して「吐き気」を覚えざるを得なくなるのである[54]．それゆえ，サルトルに従えば，D さんは「人工的な光」を見て「吐きそう」になっていたとき，まさに世界の諸事物を偶然的な存在として見出していたと考えられる．また，彼女は，世界の諸事物の有するこうした偶然性を忘れ，これらに表層的な意味を与えて充足している人間に対して或る種の欺瞞性を感じ，彼らおよび彼らによって作られてきた創作物への反感を覚えずにいられなくなっている．このときの彼女は，まさに自我体験を契機として今まで慣れ親しんできた世界と無によって切り離され，当該世界を親しみを欠いた世界として見出すようになっていたので，この世界で見出される個々の事物も親しみを欠き，自分によって道具的に利用され得ない事物として見出すようになっていたのではないだろうか．

おわりに

以上の論述に基づけば，以下のとおり言えるのではないだろうか．筆者は今回，自分の担当する講義で体験談の提供を呼びかけ，数名の学生の協力を得たに過ぎなかったにもかかわらず，非常に興味深い資料を得られた．このことは天谷によって指摘されているとおり，自我体験は思春期の青少年の間では決して珍しくないことを示唆していると考えられる．しかも，当該体験は以前に発表した論文で述べたとおり[55]，不登校など思春期的な問題の根源であり，思春期の子どもたちの心理を理解する上で非常に重要であると考えられる．今後の研究では自我体験に関するデータを数多く収集すると共に，当該体験およびこれに由来する各種問題の諸相を詳しく記述し，思春期危機の本質を明らかにしていきたい．

注

1）渡辺恒夫・高石恭子編，2004，『〈私〉という謎―自我体験の心理学―』，新曜社．

2）「世界－内－存在」はハイデッガーの著作『存在と時間（*Sein und Zeit*）』で用いられた術語で，サルトルの著作『存在と無―現象学的存在論の試み―（*L'être et le néant―essai d'ontologie phénoménologique―*）』でも être-dans-le-monde と直訳されて用いられている．ハイデッガーに従えば，ここで「内」と訳されているドイツ語 in は，事物にとっての空間的な内部性（Inwendigkeit）を意味するのではない．むしろ，この語は住むこと，居住すること，滞在することなどを意味する innan-に由来し，「世界と親しんでいる（mit der Welt vertraut sein）こと」，「世界のもとに住まっている（bei der Welt wohnen）こと」を意味している（Vgl.Heidegger, M., *Sein und Zeit,* S.54f, Max Niemeyer Verlag, Tübingen,1986）．なお，innan-は現代英語でも in および inn（宿）として残っている．

3）小出浩之，「分裂病から見た思春期」（中井久夫・山中康裕編，『思春期の精神病理と治療』，pp.63～87）pp. 73～74，岩崎学術出版社，1978.

4）渡辺・高石編，前掲書，p. 6 参照.

5）同上，p. 51.

6）同上，p. 53 参照.

7）天谷祐子，「『私』への『なぜ』という問いについて：面接法による自我体験の報告から」（『発達心理学研究』第 13 巻第 3 号，pp. 221～231），p. 221，2002 参照.

8）ビューラー，Ch.（原田茂訳），『青年の精神生活』，協同出版，pp. 92～93，1969.

9) Sartre, J.P. *L'être et le néant－essai d'ontologie phénoménologique－*,p.331, Edition　Gallimard, Paris,1973
10) Ibid.,p.33
11) Ibid.,p.34
12) Ibid.,p.60
13)「超越」とは「自己の意識経験に属さないもの」を指し，意識を越え出て意識の外にあるものを意味している（木田元・野家啓一・村田純一・鷲田清一編，『現象学事典』，弘文堂，「超越／内在」の項，1994 参照）.
14) Sartre,op.cit., p.17
15) Ibid., p.34.
16)「反省」とは，自分自身を対象としてとらえる意識の作用を指す（cf. Sartre,op.cit., p. 19）.
17) cf. Sartre,op.cit.,p.34
18) Ibid.,p.124
19) cf. ibid.,pp.124～125
20) 本稿では，［　］内の文言は引用者による補足とする.
21) 渡辺恒夫・小松栄一，「自我体験：自己意識発達研究の新たなる地平」（『発達心理学研究』第 10 巻第 1 号，pp. 11～22），p. 17 参照，1999.
22) Sartre,op.cit.,p.34
23) Ibid.,p.182
24) 天谷，前掲論文，p. 227 参照.
25) 渡辺・小松，前掲論文，p. 17 参照.
26) Sartre,op.cit., p.395
27) 渡辺・小松，前掲論文，p. 17.
28) 笠原嘉，『青年期』，中央公論社，pp. 42～43，1977 参照.
29) サルトルに従えば，他者の根源的な存在は身体としてではなく「私にまなざしを向けている者」(Sartre,op.cit.,p.315)，すなわち，私に対してまなざしを向け，私を対象としてとらえる純粋な機能として立ち現れるとされる（cf. ibid., pp.314f.）.
30)「事実性」とは「あるものが必然的とはいえない仕方で，つまりその背後に遡ってしかるべき理由を見出せないという仕方で，ただ与えられてあるという，その事実性格を意味する」（木田・野家・村田他，「事実性」の項参照）.
31) cf.Sartre,op.cit.,pp371f.
32) 小出，前掲論文，pp. 70～72 参照.
33) 河合隼雄編，『岩波講座・精神の科学第６巻・ライフサイクル』，岩波書店，p. 169，1983 参照.
34) 斎藤学・波田あい子，『女らしさの病―臨床精神医学と女性論―』，誠信書房，pp. 36～37，1986 参照.
35) 同上，p. 37 参照.
36) 同上，p. 39 参照.
37) 同上，p. 7.
38) 久世敏雄・齊藤耕二監修，福富護他編，『青年心理学事典』，福村出版，p. 377，2000 参照.
39) 中井・山中編，前掲書，p. 226.
40) クリスプ，A. H.，『思春期やせ症の世界』，紀伊国屋書店，p. 56，1985 参照.
41) 同上，p. 227 参照.
42) 下坂幸三編，『過食の病理と治療』，金剛出版，pp. 24 以下，1991 参照.
43) クリスプ，前掲書，pp. 79 以下参照.
44) 同上，p. 174.
45) cf.Sartre,op.cit.,p.372 et p.394

46) cf.ibid., pp.394ff.
47) 竹内常一,『子どもの自分くずしと自分つくり』, 東京大学出版会, p. 16, 1987 参照.
48) cf.Sartre,op.cit.,pp. 393ff.
49) cf.ibid.,pp. 421
50) cf.ibid. , pp. 420ff.
51) 大塚英志, 『「おたく」の精神史―1980 年代論―』, 講談社, pp. 277 以下, 2004 参照.
52) 1989（平成元）年８月 17 日付け徳島新聞夕刊の記事による.
53) 別冊宝島編集部編, 『いまどきの神サマ』, 宝島社, pp. 280 以下, 2000 参照.
54) cf., Sartre,op.cit.,p.404
55) 拙著, 「思春期問題としての不登校―『自我体験』に関する現象学的考察を手掛かりとして－」（『人間関係学研究』第 14 巻第１号, pp. 13～21）, 2008 参照.

平成21年（2009）12月３日受理
平成21年（2009）12月31日発行